

古井由吉「中山坂」論

一

古井由吉の「中山坂」は昭和六十一年一月の「海燕」に発表され、短編集『眉雨』^{〔1〕}（昭61・2、福武書店）に収録された。古井は、「中山坂」で川端康成文学賞を受賞した。川端賞はその年の最も優れた短編に与えており、古井は短編の名手と言つてよい。

川端賞を受賞したにも関わらず、「中山坂」について本格的に論じたものは管見の限りない。^{〔2〕}そこで本稿では、この作品について詳細に考察したい。構成や登場人物や文体や内容などを詳しく分析した後で、視点や語りや空間や時間についても掘り下げたい。ひいては評価にまで言及したい。特に内容については、何をどのように描こうとしたのか、それがいかなる効果を発揮しているのかを作品内部の細かな襞に付き従つて読み解きたい。

和 田 勉

この小説が現代を表象してゆくにあたって、どのような効用を持つていたのか。二項対立と両義性という視点からも検証する。現代文学を先導する古井が、どのような小説方法を模索していたか。作家としての視座や境地についても考察したい。作品の構造をそれが書かれた意図にまで遡ることで、状況に對峙する作家の姿勢や状況によつて相対化される作家の生の様態を探りたい。現代という時代に即した文学を模索し続けた古井のケースを問題にしていくことは、彼個人の表現者としての展開を考へていくばかりでなく、現代日本文学の置かれた状況の内実を照射することにもなるだろう。

現代とは、「知」の枠組みが大きな変化を遂げようとしている時代だということも耳にする。確かに生活のあり方や価値観、更には意識や感性や欲望などが従来と異なつたものになりつつあることを実感せざるを得ないだろう。作家とはまさに時

代と密接に関わっており、現代日本文学を先導する古井も、それは痛切に実感しているはずである。

昭和六十一年の古井は四十九歳であり、一月に芥川賞の選考委員となっており、二月に連作『仮往生伝試文』の第一作「刷の静まり」を発表している。少し遡ると昭和六十年に『明けの赤馬』（福武書店）を、昭和五十九年に『東京物語考』（岩波書店）等を刊行し、昭和五十八年に『権』（福武書店）で谷崎潤一郎賞を受賞するなど充実した創作活動を行っていた。その時期に「中山坂」を書いた古井の現実認識や時代感覚というべきものや、作家としての成熟ということも読み取りたい。

二

「中山坂」の冒頭には、「九月も最終土曜日の正午すぎ頃、総武線は下総中山駅の、発車間際の下り電車から若い女がホームへ駆け降りた。車内は学校帰りの生徒たちやもうひとつ先の西船橋まで行く競馬客やで込みあって、人の乗りこんで来る頃にいきなり走り出た女に脇をぶつけられたり足を踏まれる客もあり閉じた扉ごしに睨んでいたが、女は車内に背を向けてジーパンの腰のわきを片手でそろそろと撫でながら、天井からさがった駅名をただ不思議そうに見あげていた。電車が走り去ると、人のすくなくなつた階段をふらりと降りて行った。若いといっ

ても三十のほうに近くは見えた」とある。九月末の昼下がりに電車に乗った二十代後半の女性を、陰影に富んだ文章で巧みに描き出している。「天井からさがった駅名をただ不思議そうに見あげていた」というところでは、何か茫然としていて、ある目的を持って行動している女性ではないことが示されている。このような都会を漂う雰囲気のある女性を描くのに古井は長けており、それは『香子』や『行隠れ』などに顕著に示されている。

若い女に背負われた老人が、よし子という女との遣り取りをうわごとのように呟く場面では、老人はよし子という女との遣り取りを一人二役のように演じてしまう。そのうわ言を聞いた若い女も、昨夜の男との遣り取りを思い出してしまう。二人共に、孤独を抱えたまま都会の寂しさの中を生きている存在であることが示されている。自分と関わっている異性が、いつ何を為出かすか分からないという不信感が根底にある。この若い女にとつて現在進行している恋愛関係も、引かれながらも生きにくさをもたらす要因となっている。性愛において、人間関係の難しさが集約的に露呈しているとも言える。そういう相互侵犯的な性愛とは違って、この老人は不思議な癒しをもたらす存在でもある^①。

死を前にした老人にとつても、見知らぬ若い女に背負われて束の間の僥倖に巡り会ったのである。それはあたかも三途の川を見知らぬ女に背負われて渡るような心境だろう。因みに、

『榎』（昭58）の杉尾が三途の川を思う場面で、「男のほうも岸まで来て今生の愛憎をすべて失い、しかし最後の報いとして誰かしら、無縁の女の手を引かなくては、みずからも渡れない。ひよっとして、無縁の男女が偶然の行逢いにより、情の薄いまじわりにより、まだ生きながらに、どんな風にしてか、手を携えて三途の川を渡ってしまう、そしてそれぞれに身だけは日常へもどって、すでに往生しているとも知らずに、別々に生きながらえる」というような境地に通うところがある。死を前にした老人に救いはなく実存として投げ出されているが、一時の癒しが若い女によつてもたらされたのである。

老人に関わる「よし子」という女も、二十代後半の女に関わる男性も影のような存在として描写されるだけで、それ以上の情報はなく不明のままである。短編であるから仕方がないところがあるが、「よし子」などはもう少し人物像につながる手掛かりがあつてもよいのではないかという思いも残る。

もつともこのしたたかな老人が、目覚めている時に軽率に自分に関わる女について喋ることはかえって不自然となつてしまふ。老人が置かれている状況については、視点人物の若い女は垣間見る位しか許されていないのであり、所詮は行きずりにしかすぎないのである。もつともあえて空白とすることで、老人の不快さや気掛かりを描き出す上では機能している。老人の混沌とした記憶の中にあつて、我知らずつい吐き出した煩惱の言

葉である。老人が女にまつわる極めて不快な思いを、その実態は不明ながら冥土の際まで引きずつていることが示されている。もはや老人に関わる「よし子」という女は属性を剥ぎ取られたまま、老人の不快な思いそのものの根源として表出されている。

なお、湯川豊は『一度は読んでおきたい現代の名短篇』の中で、この老人の寝言に近い呟きを、若い女自身の台詞として捉え、「女はそういつてから、昨夜なら知りませんけど、と思う」と述べているが、妥当とは言えない。女の幻聴として捉えるにも無理がある。ここはあくまで背負われている老人の寝言に近い呟きを、背負っている若い女が聞いたと捉えるべきだろう。その後、「老人は黙りこんで、返事を待つ様子もなかった。寝息みたいのをかすかに立てている。今頃はよし子という女に抱えられて、どこの道を歩いているつもりか、知れやしな。自分もよし子という女に、正体の失せた老人をひよいと渡して、遠いところまで寝過して来たけれど何もなかったな、と手を揺すつて帰るところのような心地がもうする」とある所が、それを示しているよう。

なお若い女が老人を背負うという動作からは、深沢七郎の『榎山節考』のような役に立たなくなった年寄りが捨てられるという姥捨山の伝説と重なるようにイメージされていると見てよい。『榎山節考』のおりんは雪の中で念仏を唱え、息子に手を振つて帰れと合図するだけだった。現代の「中山坂」の老人

は、「家族たちも呆れて放つている」が、騎手の帽子の七色を若い女に教えること位しかできないのである。

背景が坂であるのは、円地文子の『女坂』などにも見られるように人生の坂道ということが寓意されていよう。⁵⁾『女坂』の倫は、妻妾同居を強いる夫の横暴に耐え、能面のような無表情のままに家を守らざるを得ない。まさに人生の坂道に耐えるしかないのである。

人生の晩年にいる「中山坂」の老人は、「坂の途中でしゃがんで休んでい」たりするのであり、若い女も昨夜の男と過ごした場所から立ち去る時には、「せかす足には、高台まで長い上り坂だった。いまにも道に尻を垂れてしまいそうに腰の片側が痛んだ」のである。二人にとっては、坂は人生の登り坂として象徴的な意味を持つているのである。

背景の描写も的確である。例えば、「濡れた路上に、花も木も近くに見えないのに、木屋の香が流れていた。夏が暑かったせいだか、秋の深まりが今年はやいのか、ほんのりと漂うなかに、ときおり鋭い、すえた香が鼻先を横切った。どうかして急に甘くなる、人の腋のにおいに似ていた。人から染まつたものとも、自分の肌のものとも、つかなくなる」とある。主人公の置かれた初秋の気配を、嗅覚などを用いて巧みに捉えている。

この作品では、競馬場に行く途中の茶店も、効果的に設定されている。老人が「わざわざ京成中山の駅で降りて、遠まわり

になるのに、長い坂を登ってくる」のは、茶店の雰囲気や人間関係が気に入っているせいもあるだろう。

茶店の主人の台詞などを通して、老人の現在の境遇が自ずと明らかにされる仕組みになっている。末期癌の老人はこの世の見納めに競馬を楽しむ。連れ添って来てくれた若い女について、茶店の女将さんに「おいおい、看護婦さんなんて、気安く言うなよ。お名前はまだうかがっていないが、この人は命の恩人だ。大門の下で、大げさによるけかかつてな。うしろから支えてもらわなければ、足腰がヤワになっているから、もろに転げて、頭蓋骨ぐらいは壊してたぞ。いまごろは、あんたたち、ピーポーの音を聞いて、爺さんとうとう往つたかつて、喜んでいたところだ。ついでに向脛を打つてな、ここまで肩を借りてきた」と「嘘も闊達」に話す。命の恩人というほどではなかったのにオーバーに言つて、若い女への感謝の思いを間接的に伝えている。この老人の世慣れたそれでいて、浮世離れたキャラクターも巧みに造形されている。女に「大げさによるけかかつて」とか、「命の恩人」とかいうような作り話を束の間に作り上げて、世慣れたところを示す。

老人が若い女に競馬場までの道順を伝えるところでは、「なに、この前を右に行つて、境内を右へ抜けて、あとは道なりだ。いまごろ行く連中もあるから、急いでいる者の、あとについて行けばいい。迷うことはない。それとも、賭事は困るかい」と

言う。「道なり⁶⁾」というのは、古井作品によく用いられる言葉で、古井文学を理解する上でのキーワードの一つとも言える。「中山坂」でも単に道のままそれに沿うということの他に、運命に随順するという思いも込められている。それは、その後の老人の台詞に「何をしている人だか知らないが、今日いまのあんたに、俺の運をのせてみたくなった」とあることにも示されている。

電車で寝過ごした女は、老人と偶然知り合いになり、代りに競馬場まで馬券を買に行ってくれと頼まれる。若い女に馬券を買うことを頼んだ老人は、眠ってしまい、後で結末を知らされる。周りの知人達は、次のような遣り取りをする。

「女に頼むといいつてことはあるんだね」「あやかりたいな」「野中さんぐらいに、つとめなくては、観音サンのご利益はないよ」「馬場まで行けなくなっても、あの坂を登ってくるんだものな」「ほんとに。明日で中山もしまいだね、来るんだらう」「あいにく法事でね。続くな、この降りは」「本命馬が泣いてるよ」「不良馬場も困るけど、法事に雨も困るな。競馬知らねえんだよ、明日のホトケさんは」とある。葬儀のせいで、折角の競馬に来られなくなつたと嘆いているのである。なお「本命馬が泣いてるよ」というのは、雨の日のような不良馬場だと、本命不在で荒れがちなることを言っているのである。

それにこの「中山坂」では、賭事で女に頼んだことで願いが叶うという展開である。ここでは、賭博で女性を守り神にする

と願いが叶うという風習が踏まえられている。沖繩などでは、今でも風習として残っているそうである。時空を越えて伝えられて来たものが、作品の奥行きを出す上で効果的に働いている。それでも、典型的なビギナーズラックと言えるだろう。頼まれた若い女は、意図的に謎めいた女性として造形されている。都会を自由に漂い、何を為出かすか分かりにくい女性である。

結末では、老人は女に、「今日はありがとう、ネエさん、これから男に会いに行くんだらう」とか、「なに、さっきネエさんが鮎を喰っているのを、脇から眺めていて、そう感じたままだよ」と言う。老人は、鮎を食べている若い女に、女としての色気みたいなものを直感的に覚えたのだろう。「きわどいな話なのに、車を運転する店の主人の背がすこしも動かなかつた」という末尾の一行も巧みで、効果的である。車を運転する店の主人も、話は聞かえているが、話の内容には遠慮して立ち入ろうとはしないのである。

野中という老人は世の中のことはよく見えていながら、癌で余命幾ばくもない人物として巧みに造形されている。癌という人生の不運に見舞われた以上は、もはやこの競馬に勝とうが負けようが、本当はどうだつていいような境地である。「帰りは勝つても負けても上機嫌」というのはそのことを示しており、道楽に耽ること自体を楽しんでいるにすぎないのであり、まさに児童に類する行為でもある。

「中山坂」では競馬場という荒涼とした場所を背景にしながら、人生の無常を描き出している。老人は冥土の土産に道楽の競馬を楽しんでおり、「これが最後になるかもしれない」のである。この老人は三途の川に足を踏み入れながら、娑婆をさ迷っているような存在である。作品の背景で雨が降っているのは、そんな三途の川めいた連想につながるという意図である。若い女の台詞に、「ほんとに、競馬場なんかあるんですか。

ここはお寺ですよ」とある。競馬場の隣に、死につながるお寺がさりげなく、しかも周到に描かれている。因みに結末で駅まで送ってもらった車の中でも、若い女は「細い坂道をくねくねと降りて行く車の、前方の雨霧の中からくりかえし迫る墓場のような暗さに目をや」っている。この世の実相を写實的に描いているように見えながら、さりげなく影絵のように冥界下りにも喩えられるようなシーンが取り込まれている。

頼まれて競馬場に来た女の感慨としても、「ここはどこなんだろう、とあらためて場内を見渡して、ここは、静かなんだわ」とまた驚いた。これだけの人が集まって、せわしなくうごめいているのに、足音が満ちるばかりで、声のざわめきも遠い。薄く目をつぶって歩き出すと、枯木の林の中を風がはるばる吹き抜けるようにも聞えた。私たちの影ばかりがひしめいて低い呻きをもらしあっている。女がひとりうつむきこんで行くのに、肩もぶつからない。雑踏の中を道がひとりであいていく。女

であることにも、気がつかないらしい」とある。喧騒の中の沈黙を覚えているのであり、競馬場という空間がこの世の果ての荒涼とした所のようにも女には思えるのである。この若い女は前売りの窓口という慣れない場所では、「迷子をすかさずみたいに懇切に教えて」もらっており、そこには人生の迷子という思も込められている。

競馬場に集まっている男達も、「起き抜けの、顔も洗わず口もそがぬ風の、生臭い精気を疲れの鬘と一緒に浮きあがらせて」「途方に暮れた幼児みたいに」見えてしまうのである。老人が眠りから覚めた時にも、「昼寝から覚めた幼児みたいだな」と女は微笑んでしまう。この老人は既に俗人としての雑念とは無縁な存在となつているので、幼児のように無邪気に見えてしまうのである。

古井は競馬好き^マで知られている。作者の好きな舞台を背景にしているのが、自在に筆が伸びている。舞台設定に関しては、ただ単に作者の好きな舞台であるというだけでなく、そこがこの世の末というような象徴的な意味も込められているのである。競馬を素材としているが、そこに現代の競争社会まで寓意されていると読む必要はあるまい。

老人と若い女という「一風変つた男女の組合せ」(『仮往生伝 試文』)が、絶妙の効果を上げている。もともと古井に実体験を踏まえた私小説とか心境小説を期待する読者がいても、それは

無いものねだりに相当するだろう。競馬場のある一日に焦点を当てるといふ体裁を取っているが、作者は身をもって実感したことを踏まえて作品を組み立てている。しかも作者による感慨や回想が含まれているにしても、そこには当然のことながら改変も含まれている。むしろ競馬場を人生の縮図として象徴させるところまで熟成させたことに、意義を認めるべきであろう。

ヒロインの若い女は競馬場にいる時に、「ここはどこなんだろう」とか「ここは、静かなんだわ」と思う。喧噪の中の沈黙を実感しており、ここはこの世の果ての荒涼とした所のようにも、若い女には思える。もともと、老人が「ネエさんにはわからないだろう。シローにシローの、二・四だ。人気のミキスキーがシローをかわせないでいるうちに、ゴール前でもう一頭のシローに首差かわされた」と言うところでは、聞いている若い女だけでなく、競馬に関心がない読者も戸惑ってしまう。ここは老人が競馬にのめり込んでいることを強調しようとしてリアリティを出そうとしたのであろうが、他に方法はなかったのだろうか。それでも読者も、見知らぬ迷宮めいた空間に誘い込む効果は上げている。

三

「中山坂」の視点や、二項対立と両義性に焦点を当てて考察

したい。

山本健吉は川端賞の選評「選后感」の中で、『新宿から乗りこんだ客だった』と、外がわから描かれていた女が、次の瞬間『(女が)不思議な気がして眺めると』と、内がわから描く立場に急転して、私をうるたえさせる」と述べている。厳密に言えば、山本の指摘は妥当だとしても、それほどこだわらなければならないまい。見ず知らずの二人が偶然出会い、二人の境遇や内面も可能な限り浮き彫りにすることが為されていることの方に意義を認めるべきであろう。導入部では鳥瞰的に描いているが、次第に若い女の内面に入り込んでいくのである⁵⁾。しかも融化して流動化しかなないところにこそ、古井文学の特質はあると見てよい。主な登場人物の二人がどちらも、あたかも漂うように浮動する感性の持ち主なのである。限定してしまうことで固定化されてしまうので、あえて曖昧な視点も含んでいるのである。

この山本の指摘を踏まえて、全知視点と限定視点ということについて考察したい。全知視点は全体を俯瞰した神のような視点であり、全ての登場人物の心理描写まで可能である。例えば夏目漱石の『明暗』等がこれに当たる。一方で限定視点は特定の人物に焦点をさぼるので、他の登場人物の心理は、その台詞や表情から窺うしかない。例えば夏目漱石の『三四郎』等がこれに当たる。

「中山坂」の導入部では、全体を客観的に俯瞰して、登場人

物のいる場所や仕草を詳細に記している。その後でおもむろに「女の行く手を老人がひとりゆつくりと登っていた」と若い「女」の視点から描き出している。若い女の内面に分け入って描いており、老人についても本人の眩みや茶店の人達の話によって分かる仕組みになっている。

後半になると、「女は両足を踏んばって、腋にアザができるわと思ったり、雨の中を眺めた」と若い女の視点から、心境まで描写されている。前半では老人は固有名詞も示されていないが、後半に茶店の人達のやりとりから、老人が「野中さん」であると読者にも分かる仕組みになっている。あくまでも客観的な手法を用いながら、それに煩わされることなく、若い女の主観がさりげなくしかも生き生きと込められている。

「中山坂」では彼岸と此岸、男と女、老年と若年、現在と過去、身体と精神といった二項対立と、両者が混沌と融合した娑婆の実相を描き出している。しかも表現する際には、小説と随想という二項対立も周到に取り込んでいる。そこには、随想に限りなく近くなることで、かえってフィクションが活きるという信念も窺える。

具体的にこの二項対立と両義性について見て行く。

老人は病気のせい、この世とあの世の間を漂っているような存在である。老人も二十代後半の女も、どちらも複雑な男女関係を引きずっている。それぞれに、複雑な男女関係を引き

ずっていることがさりげなく分かる仕組みになっている。この世のしがらみを生きて行く上で、年寄りであろうと二十代後半であろうと、苦勞は尽きないのである。作品の中では、現在と過去の回想が、交錯しているところが随所に見られる。これは現代人の内面が、自在に現在と過去を往還していることの実情に添わせようとしたものである。また老人と二十代後半の女の二人の遣り取りが主に描かれているが、回想や他者の台詞によって置かれた状況やこれまでの人生が自ずと浮かび上がるように設定されている。

身体と精神についても、競馬場にいた若い女の回想の中に、「恥も知らぬげのことを身体がひとりにつぶやきつつのついで」とある。精神と身体が錯綜していることが窺え、あたかも身体が優位にあるかのような捉え方であり描き方である。これらの二項対立と両義性によって、老病死にまといつかれた人生の実相を、三途の川のような競馬場を舞台にして見事に形象化している。一見競馬場を舞台としているように見えながら、実はそこは三途の川にも通うようなこの世の末のような場所だったのである。「中山坂」は現実の中山という競馬場を舞台とする体裁を取りながら、そのような深層世界がさりげなく寓意されている。

四

以上のように見てくると、吉行淳之介が川端賞の選評「秀作二篇」^⑨の中で、「古井由吉『中山坂』は、人間の生と死、人間の営みということに深く届いている作品である。(中略)『古井由吉の短篇を一篇』というときに、『中山坂』ということになりそうな作品である」と述べていることは納得できる。「中山坂」は人の世の無常の実相を、競馬場を舞台にして描いた作品と言える。もともと老人の野中は茶店に辿り着いたにすぎず、偶然知り合った女が賭博の守り神の役を果たす。

現代の口語文は足腰が弱いが、「中山坂」を始めとする古井の小説では、それを可能な限り克服している。洗練された文章として高く評価することができる。現代の口語文を用いながら、芸術的な味わい深い文章が目指されている。もともと、否定的な評価としては、屈折し過ぎて分かりにくいというのがあがるが、この「中山坂」の場合にはそれは当たらない。

「中山坂」は人生が老病死にまといつかれた寓話として機能していると共に、作者の見聞を踏まえて書かれた随想的な作品ということでもリアリティも獲得している。近年の古井は、『辻』(平18、新潮社)や『やすらい花』(平22、新潮社)や『鐘の渡り』(平26、新潮社)等では、物語やストーリーを展開することを極度に抑制している。随想に限りなく近くなることでフィクション

がかえって活きるし、クールな現代人の感性にも合うと考えているのである。年譜的な事実を照らして作品の事実を解説することは、「中山坂」の人物設定において当てはまらないところもあるが、競馬場の持つ荒涼とした雰囲気は作者の実感したことが踏まえられているのである。現代人の感性が随想的になつているので、それに添うように描いているのである。あえて物語を作つて読者を感動させるようなことは、極力抑えられている。森の中の一本の木に等しい個人の内面を丹念に描くことにこそ、かえって小説としての存在意義を認めているのである。

こんな古井の対極にいるのが宮本輝で、『泥の河』や『螢川』や『春の夢』等に顕著に示されているように、意図的にストーリーを展開しており、お涙ちょうだいの物語と言える程に描いている。宮本の作品では少年や小動物を描くので、読者は感情移入し易いが、古井はむしろそこにセンチメンタリズムに陥りかねない弊害を認めているのである。

「中山坂」は、我々の生のすぐ隣に死が潜んでいるということを実感的に描き出している。この作品では彼岸と此岸、男と女、老年と若年、現在と過去、身体と精神、小説と随想などといった二項対立と両義性という視点をさりげなく取り込みながら、混沌とした娑婆の実相を巧みに表出している。

古井は内向の世代を代表する作家と目されながら、必ずしも研究が十分に為されている訳ではない。「中山坂」は「雨宿り」

や「木犀の日」等と共に古井を代表する短編であるだけでなく、近現代を代表する優れた短編と言つて良いと思われる。もともと古井の本領は『仮往生伝試文』や『槿』や『白髪の唄』等の長編にあるので、あくまで古井の短編小説の中では「中山坂」は優れているという留保を付けておく必要がある。

注

勉 (1) 短編集『眉雨』には九編が収録されているが、「秋の日」や「踊り場参り」のように私小説的・随想的な作品がある一方で、「眉雨」のような幻想的な作品もある。

和 田 (2) 川端賞の選考委員の井上靖・大江健三郎・山本健吉・吉行淳之介が「選評」で述べている。また三浦雅士が『眉雨』（福武文庫、平1）の解説「距離としての文体」で、湯川豊が「一度は読んでおきたい現代の名短篇」（平30、小学館）で「中山坂」について触れている程度である。

(3) 湯川豊は『一度は読んでおきたい現代の名短篇』の中で、「中山坂」について、「私はかねがね、ぼんやりした人間を描くことに、作家の力量がしめされるのではないかと、勝手に考えているところがある。人は多くの時間をぼんやりと過しているが、それを描くのは容易なことではない。微にいり細をうがつのに長じた文体をもつ古井由吉は、この『ぼんやり』を巧みに捉えて、一つの短篇を展開してゆく」と述べて評価している。

(4) 川上弘美の『センセイの鞆』の老人と若い女との性愛を伴わないつなかりに通うような所がある。

(5) 森鷗外にも『鼠坂』という短編があり、『雁』の舞台は無縁坂である。

(6) 短編集『眉雨』には「道なりに」という表題の作品も収録されている。また他にも「中山坂」に用いられていて、古井を理解するキーワードとしては、「興が尽きた」「眉をかすかにしかめて」「後生ですから」「ついと目をそらし」「眉をひそめて」「齒ぎしりするみたいな面相」「怪訝そう」「三白気味」など仕草や顔の微妙な表情を示す言葉がある。これらは実情を繊細に描き出すと共に、読者に共感を呼ぶ為の言語戦略である。古井の小説に連続と続くこだわりであり技法でもある。

(7) 古井が競馬に言及した作品としては、『明けの赤馬』（昭60、福武書店）『折々の馬たち』（平7、角川春樹事務所）等がある。『仮往生伝試文』（河出書房新社、平1）でも、平安時代の往生譚を綴った古文めいた文章から現在の中山競馬場へつないでいる。日記の体裁を取った三月三日の箇所には、「中山競馬場の観客席は東向きなので、午後に入るとめっきり翳ってくる。（中略）中山ではよく一風変わった男女の組合せを見かける」とあり、「中山坂」ともつながって来る。「埴輪の馬」（『野川』所収、平16、講談社）にも、「昨年暮れの中山の競馬場で、秩父に住まう人が土地の土産にさまざまな馬の形の素焼の飾り物を、来春の午年の縁起にそれぞれ小袋に入れて配ってくれた」とある。なお、日本ペインクラブ編『競馬を読もう』（平12、福武文庫）には「中山坂」も収録されている。

(8) この視点の推移に関連して三浦雅士は「距離としての文体」(『眉雨』解説)の中で、「冒頭では突放すように描かれていたのが、いつのまにか内心まで覗かれるようになっていく。それが不自然を感じさせないのは、総武線を俯瞰できるような眼は女自身にしても持っているからである」と的確に指摘している。

(9) 「中山坂」の他のもう一編は、阪田寛夫の「海道東征」である。